

四月：テーマ評論『西歐精神について』『適應異常について』。

「ライブドア堀江氏による電波ジャックが意圖され、『正論』路線を行くフジサンケイグループがおびやかされてゐる今日、福田恆存から學ぶべき問題として評論『西歐精神について』（全集第四巻所載）『適應異常について』（全集第五巻所載）を、次回のテーマ評論として取り上げたいと思ひます」（相馬 記）

《参考意見》

吉野の觀點：「ホリエモン」は上手く法の網の目を潜つた。（ヤフーブログ等にて三月上旬より書き込み）

しかし、「ホリエモン」の面相に殺伐たる精神性を見せられるにつけ、シェークスピアの格調高き臺詞（せりふ）に想到せざるを得なくなる・・・。

「この堕落しきつた末世では罪に汚れた手も、黄金の鍍金（メッキ）をほどこせば、正義を卻ける事もできよう。邪な手段で獲ち得た寶（たから）でも、ままあること、それで國寶を買ひとつてしまへば、事はすむ。が、天ではさうはいかぬ。ごまかしは效かぬのだ。いかなる行ひも、あるがままに裁かれ、否も應もない」（福田恆存譯『ハムレット』第三幕第三場：王位篡奪者「ボローニアス」の臺詞）

~~~~~

**「ライブドア」堀江氏の精神性の低さが透けて見える。**

堀江氏曰く。「投資家にとって邪道かどうかは関係ない。するいと言われても合法だったら許される。倫理觀は時代で変わらるから、ルール以外に（よりどころは）ない」（「産経新聞」三月二日附記記事より）

・・・さうであらうか。

時代によつて変わらぬのが「倫理」なのである。

「變化」と言ふ相対的なるものではなく、倫理は「神・佛・天」等の絶対価値がそれを背後から支へ、權威づけているのである。故にそれは「不動」なのである。

此處に、堀江氏の精神性の低さが透けて見える。ただお金儲けへの「おつむの良さ」だけが。

そして福田恆存の言ふ、「日本人の西歐近代に對する適應異常」。その現象なるものの一例が此處に露出してゐるのが分かる。

即ち、資本主義を「利潤追求（金儲け）の最高方法論」としか捉へぬ、日本人の西歐近代に對する「適應異常」と、對するに、西歐近代が持つ「資本主義を發展せしめた社会的主体は宗教改革の神」と言ふ、正統なる把握の違ひが。

別な言ひ方をすれば、「プロテンスタンティズムの倫理と資本主義の精神」。

資本主義を先導したものは、宗教改革「プロテンスタンティズムの倫理」なのだと言ふ視點。

それが堀江氏のみならず、彼に似た人士には缺如してゐる、と言ふ事なのである。「公器＝放送・新聞」を乗取る行爲に、自己を背後から掣肘する「神の眼＝倫理・良心」が喪失されてゐる。そんなものをとうの昔から、持つてない彼の頭に問ふのも野暮な話だが。ご参照は、

「自分と言葉（例：資本主義）との距離が測定出来ぬ人間は近代人ではない。いや人間ではない」

（「此處が解かりにくい福田恆存」）

<http://www.geocities.jp/sakuhinron/page036.html>

の「PDFファイル」、

十二頁：《各例題に対する適応異常と適応正常化》。

~~~~~

《福田恆存評論との比較》『西歐精神について』『適應異常について』

吉野視點	ライブドア堀江氏	参照：福田恆存評論他 関聯文。括弧内は吉野挿入。
倫理及び倫理観に関して	<p>彼の一連の言動から明確に缺如してゐるのが窺へるのは。故に「敵対買収」と言ふ企業倫理缺如の行動に帰結した。</p> <p>・・・参考：「投資家にとって邪道かどうかは関係ない。ざるいと言われても合法だったら許される。</p> <p>倫理観は時代で変わることから、ルール以外に（よりどころは）ない」</p> <p>（「産経新聞」三月二日附記事より）</p>	<p>「なにが悪でも、なにが善でもないといふ現代日本人の非倫理的性格（相對主義の泥沼）——私の仕事のすべてはその究明に集中されてきたといつていい」（全三：『個人と社會』）</p> <p>《シェークスピア劇より》括弧内は吉野挿入。 下線部分の缺如性が日本人の問題。</p> <p>「この堕落しきつた末世では罪に汚れた手も、黄金の鍍金（メッキ）をほどこせば、正義を御ける事もできよう。邪な手段で獲ち得た寶（株）でも、ままあること、それで國寶（近代国家では電波も寶では）を買ひとつてしまへば、事はすむ。<u>が、天ではさうはいかぬ。ごまかしは效かぬのだ。いかなる行ひも、あるがままに裁かれ、否も應もない</u>」（福田恆存譯『ハムレット』第三幕第三場：王位篡奪者「ボローニアス」の臺詞）</p>
倫理とは相對的なるものにはあら	・・・さうであらうか。 「變化」と言ふ相對的なものではなく、倫理は「神・佛・天」等の絶対価値がそれを背後から	《倫理・理想人間像（イエスの人格化）・絶對神との関聯》・・・絶對理想的概念では。 参考 倫理：人として守り行うべき道。善惡・正邪の判断において普遍的な規準となるもの。道徳。モラル（「大辞泉」）

す。	支へ、権威づけているのである。故にそれは「不動」なのである。此處に、堀江氏の精神性の低さが透けて見える。ただお金儲けへの「おつむの良さ」だけが。	<p>1. 棒子の原理と同一性：「相對の世界（物體）・論理（棒）・支點（絶對）。この動かぬ絶對を支點として間接に用ひたために、ものが楽に動くわけです」（『西歐精神について』P223）</p> <p>2. 「理想人間像こそは自我を否定する唯一のメントである」（『理想人間像について』P476）</p> <p>3. 「過去、現在、未來のいづれをもひいきにしない絶對者といふのは、そのいづれをもひとしく否定する超絶的なものでなければならない。この神の前においては、進歩といふことはありえぬ」（『絶對者の役割』P285）</p> <p>・・・以上から「倫理及び倫理観」は時代によって變はつてはならない、と判断できるのでは。倫理は支點（絶對）の役割を持つ。變化（遊動）してゐたのでは現實（相對の世界）は持ち上がりない。倫理の背景にあるのは宗教（或いは宗教「C」的なるもの：聖書・佛典・コーラン・儒教等）。</p>
『西歐精神について』より。 昭和三十二年一月著	<p>資本主義も「神に型どれる人間の概念の探求」（近代西歐精神）の一つ。さうした想念が彼には缺落してゐる。</p> <p>その意味で堀江は「資本主義」及び西歐近代に適應異常をきたしている人間と言へる。</p>	<p>「ルネサンス以来、近代が自己の發明として誇つてゐるあらゆる人間活動の成果は、藝術にせよ、思想にせよ、政治制度にせよ、すべて中世の精神が支點としての絶對神をいただいたといふことに基づいてゐる」P223</p> <p>「福田恆存を讀む會テキスト」P5～8 参照</p> <p>参考：歴史の意識（西歐）・・・「絶對者のないところに歴史はありえない」のである。</p> <p>クリスト教の絶對神による「統一性と一貫性との意識が人間の生活に歴史を付与」した。⇒そしてその神（絶對者）そのものが「近代を過去のアンチテーゼとして成立せしめる歴史の一貫性」を形作つた。即ち西歐は「反逆すべき神」として中世を持つことが出来たのである。⇒「なぜなら神と言ふ統一原理はその反逆において効力を失うものではなく、それどころか反逆者の群れと型とを統一しさへする」⇒近代西歐精神を「神に型どれる人間の概念の探求」と言ふ形で統一していつたのである。（参照：『近代の宿命』P462、及び同発表文中「西歐歴史的統一性：図解」及び『現代人の救</p>

		ひといふこと』)
吉野の 視點： 以下文 参照	<p>1. 資本主義を「利潤追求（金儲け）の最高方法論」としか捉へぬ、日本人の西歐近代に對する「適應異常」現象。</p> <p>2. 「戦後民主主義」「相對主義の泥沼」の浅瀬に發生する泡沫現象の一つ。</p> <p>3. 堀江氏の言「金がすべて」=拝金主義者、間貫一（『金色夜叉』主人公）との相似性。</p>	<p>「資本主義を發展せしめた社会的主体は宗教改革の神」</p> <p>「相對的なものを絶対としてゐるといふ意味で、論理的にはエゴイズム」（『西歐精神について』（全四P 222）</p>
『適應 異常に ついて』 昭和三 十八年 十一月 著	<p>堀江の場合、「P 364」が当てはまる。</p> <p>「近代化による壁なし社會の形成」=集団的自我（A）上の自己を縛る宿命（關係）の希薄化・・・</p> <p>1. 神の棲まぬ國にして、しかも「美感」も喪失した宿命不在の現代日本の堀江にとつては、法は網の目を潜るべき對象としか映らなく、又「金」以外は頼るべき物はない。</p> <p>2. 倫理缺如がもたらす法律（小壁・場）無視。それが招く、法律への「透明化的錯覚」による非拘束現象。</p>	<p>「適應異常とは要するに、欲求不満の原因であり結果であるにすぎぬ」「私は日本の近代史を『近代化に對する適應異常の歴史』として見直すことを提案します」と恆存は言ふ。</p> <p>・・・「日本の近代化に適應し得なかつた一般大衆」。そして知識階級にこそその病状が。（P 367）</p> <p>とは、以下の事を意味するのでは。即ち「精神の近代化」が出來てはゐない爲に起きる「物質だけの近代化」に對する適應異常であると。そして「物質だけの近代化」に對する欲求不満の結果としての適應異常であると。</p> <p>* 日本の近代化とは、恆存はかく言ふ。</p> <p>「（日本は近代化を）物質面においてだけやつた。その物質面で行われた近代化に対する、適應能力としての、『精神の政治学』としての近代化。これはまだ行われてゐない」（講演カセット「日本の近代化とその自立」より）即ち「精神の近代化」が出來てはゐないと。</p> <p>[『讀む會』テキスト：8・9頁図参照]</p> <p>「精神の政治学」の分割線が下まで下がつてないと言ふ事では（甲・乙図参照）。物質面における近代化は行はれたとは「乙構図：日本的精神主義構図（非近</p>

代)」のまでの物質面（A 上のみ）での近代化であったと言ふ事。⇒「甲図」から創出された近代西欧製品を、「乙図」状態のまで先進国化と言ふ模倣（輸入）をした事によって生じた適応異常。「科学製品は輸入できても科学精神は移植できなかつた」（『近代日本文学の系譜』）とはその事を指す。西欧近代の各種概念や観念（言葉）の「自己所有化」ができなかつたのである。

西歐近代（甲図：P 8）の物質面のみを眞似て、甲図になつたと錯覚した。乙図（精神的非近代化）のままなのに甲図と錯覚してゐる處からくる、各種情況への適應異常。